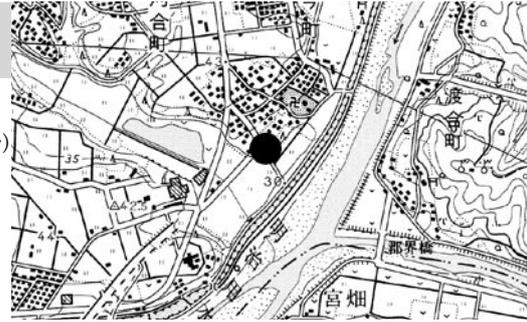


いまちよう
今町遺跡

所在地 豊田市今町8丁目
(北緯35度02分16秒 東経137度10分11秒)
調査理由 第二東海自動車道横浜名古屋線
調査期間 平成18年4月～6月
調査面積 2000㎡
担当者 宮腰健司・鈴木正貴・岡久雅浩



調査地点 (1/2.5万「豊田南部」)

調査の経過 調査は中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道の調整池建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成18年4月から6月にかけて実施した。本遺跡は平成10・12年度に第二東海自動車道の橋脚建設予定地(当時)部分の8400㎡が調査されており、今回の調査区はその未調査部分を埋めるような形で設定された。調査区の形状からA区～C区の3区に分けて行った。

立地と環境 今町遺跡は矢作川右岸に位置する標高約28mの碧海台地端部に立地する。調査地点の南で矢作川は巴川と大谷川が合流し、付近は加茂郡と碧海郡と額田郡の境界線に近い。

調査の概要 今回の調査では、古代から江戸時代までの遺構や遺物が確認されたが、室町時代前半以前の明瞭な遺構は確認されなかった。確認された遺構は大きく戦国時代～江戸時代中頃と江戸時代後半に大別できる。

戦国時代～江戸時代中頃 この時期は過去の調査区を合わせると大きく屋敷地が11区画確認されている。屋敷地は溝で囲まれた一辺が20m～30mの崩れた方形で、内部には掘立柱建物跡、井戸、水溜状遺構などが存在する。掘立柱建物跡は柱穴の数が非常に多いことから繰り返し建て替えられたと思われる。井戸には素掘りの井戸と石組井戸があり、屋敷の南端部では区画溝に連結した水溜状の遺構が配置された。これらの屋敷には、出土遺物からみて16世紀後半～18世紀後半に機能したと考えられる。

江戸時代後半 江戸時代後半でも屋敷割は戦国時代から江戸時代中頃の区画とあまり変化しないが、18世紀後半くらいに部分的に溝を付け替えたり整地したりした状況が確認された。ただ、19世紀の遺物が少ないことから人々は徐々に現在の今町の集落に移転したことが考えられる。

まとめ 今回確認された屋敷群は規模がそれほど大きくないため支配者層の居宅とは考えにくい。遺跡が加茂郡南端の郡境にあり3河川が合流する地点であることから、矢作川水運を利用した交易の中継点として機能した集落跡の可能性が考えられる。(鈴木正貴)



B区遺構全体(西から)



B区の区画溝と水溜状遺構(南東から)



C区遺構全体(南西から)



石敷火処遺構 SK1043(北東から)



戦国時代の井戸 SE03(東から)



江戸時代の石組井戸 SE01(東から)

